



# 人は死んだらどうなるか？

天国、地獄、煉獄、どこに行く？

大争闘シリーズ No.4



大争闘シリーズ No. 4

# 人は死んだらどうなるか

天国、地獄、煉獄、どこに行く？

(キリストとサタンの大争闘 33 章)

# 目次

## Contents

最初の大欺瞞	1
失われた永遠の生命	5
サタンの魔の手	8
恐るべき永遠の責め苦説	11
普遍救済説の欺瞞	16
誤った聖書解釈	22
人は自ら運命を定める	27
神の正義とあわれみ	31
永遠の生命か、永遠の滅びか	34
死後の状態	37
復活信仰の重要性	42
審判はいつ行われるか	46
死は眠りである	49

## はじめに

人生の様々な謎の中で、死後の問題ほど大きい位置を占めているものはない。

人が死んだら、すべては終わりなのだろうか。死んだら、すぐ善人は天国に行くのだろうか。悪人はすぐ火の地獄へ行くのだろうか。永遠の責め苦というのがあるのだろうか。神は愛の神だから、結局はみんな天国に行くという、普遍救済説もある。霊魂は不滅という説は何処から来たのだろうか。死んだら霊魂はどこかでいつまでも生き続けるのだろうか。

聖書の言葉でこれほど曲解されている問題はないのではなかろうか。よく死んだら「昇天」「召天」という言葉がキリスト教会でも、一般でも使われる。

「死者に意識があるという教理は、霊魂不滅という根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。」

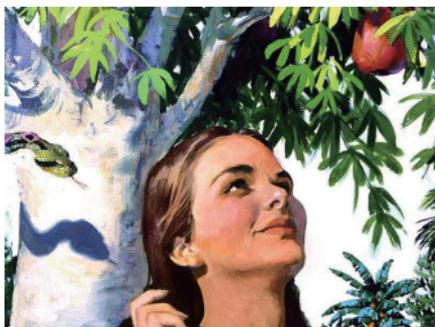
## 最初の大欺瞞

人類歴史の最初から、サタンは人類を欺こうとする働きを始めた。天で反逆を起こしたサタンは、地上の住民をも自分の側に加担させ、神の政府に対する抗争に加わらせようとした。当時、アダムとエバが神の律法に服従し、完全な幸福の状態にあったことは、サタンが天で強調してきたこと、すなわち神の律法は圧政的で、被造物の幸福に反するものであるとの主張に対して、たえず不利な証言となっていた。そればかりではなく、この罪のない二人のために備えられた美しい家郷をながめて、サタンは嫉妬心を燃やし、何とかして彼らを墮落させようと決心した。彼は彼らを神から引き離して、自らの権力下に置き、この地球を手に入れて、ここに至高者なる神に反抗する自



分の王国を建設しようとした。

アダムとエバは、この危険な敵について警告を受けていたので、サタンがその本性そのままの姿を現したなら、直ちにはねつけられることは当然であった。そこで彼は、その目的を最も効果的に達成するために、真意を隠して秘密に働いた。そのための媒介者として、当時最も優美な生き物であったへびを用いた。へびはエバに向かって言葉をかけた。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記 3:1）。この時、エバが誘惑者と言葉をかわしさえしなかったら、彼女は安全であっただろう。だが彼女は、サタンに関わり合ったために、彼の策略に陥ってしまった。今でも同様の経路のもとに、多くの者がサタンに打ち



負かされるのである。彼らは、神のご要求について疑いを抱き、議論する。彼らは、神のご命令に従わないで人間の説を受け入れるが、それは、偽装されたサタンの策略にすぎない。

「女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました。』へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです』」（創世記 3:2-5）。この時サタンは、あなた方は神のようになって、これまでよりもすばらしい知恵を持ち、一層高い身分になることができるだろうと言明した。エバは誘惑に負け、アダムもついに彼女に感化されて罪を犯してしまった。彼らは、神の言葉はそのまま信じるべきではない、というへびの言葉を

受け入れた。彼らは、創造主を信じないで、神が彼らの自由を束縛しておられるものと誤って考え、神の律法を犯すことによって、絶大な知恵と高い地位を得ようとしたのである。

しかしアダムは、罪を犯した後「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」という言葉の意味をどのように悟ったであろうか。果たして彼は、サタンが信じさせようとしていたように、もっと高い身分に導き入れられたであろうか。もしそうだとすれば、罪を犯すことによって大きな利益が得られ、サタンは、人類の恩人になったわけである。しかしアダムは、神のみ言葉が決してそういう意味ではなかったことを知った。罪の刑罰として人間はその取られたところの土へもどらなければならないと、神は宣告された。「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」(同 3:19)。「あなたがたの目が開け」というサタンの言葉は、次のような意味においてのみ真実であった。すなわち、アダムとエバは、神

にそむいたあとで、目が開かれて、自分たちの愚かさを悟った。彼らは悪を知り、戒めを犯した苦い結果を味わったのであった。

## 失われた永遠の生命

エデンの中央にはいのちの木があり、その実には、生命を永続させる力があつた。アダムは、神に忠実である限りこの木に自由に近づくことができ、永遠に生きることができた。しかし彼は、罪を犯したため、いのちの木の实を食べることができなくなり、死ぬべきものとなってしまった。「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」との神の宣言は、生命の絶滅を意味するものであつた。



服従することを条件として人間に約束された不死は、戒めを破ったために失われた。アダムは、自分が持っていない不死を、子孫に伝えることはできなかった。神がみ子の犠牲によって、不死を与えて下さらない限り、墮落した人類に生きる望みはなかったのである。「すべての人が罪を犯したので、死が全人類には入り込んだのである」が、キリストは「福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである」（ローマ 5:12、Ⅱテモテ 1:10）。しかも、不死は、キリストによってのみ獲得することができるのである。「御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがない」とイエスは言われた（ヨハネ 3:36）。誰でも条件に応じさえすれば、この貴重な祝福を手に入れることができる。「耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものを求める人に、永遠のいのちが与えられ」るのである（ローマ 2:7）。

アダムに向かって、服従することなしに生命を約束したのは、大欺瞞者サタンだけであった。そして、エデンの園において「あなたは決して死ぬことはないでしょう」と、へびがエバに宣言したことは、霊魂不滅に関する最初の説教であった。し



かも、サタンの権威だけに基づくこの宣言が、キリスト教界の講壇からくり返して叫ばれ、そして、我々の祖先が受け入れたように、人類の大部分は、簡単にそれを受け入れているのである。「罪を犯す魂は死ぬ」と神が宣言なさったにもかかわらず、罪を犯す魂は死なないで永遠に生きるという意味に解されている（エゼキエル 18:20）。サタンの言葉は軽々しく信じながら、神のみ言葉はなかなか信じようとしない人々の不思議な迷妄には、ただただ驚かずには

いられないのである。

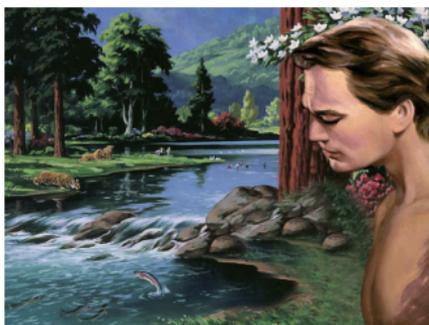
万一、人類が墮落後も、自由にいのちの木に近づくことが許されたとするならば、人間は永遠に生きることになり、罪を永遠に伝えることになってしまったであろう。そこで神は、天使ケルビムと炎の剣によって「命の木の道」を守らせたので、アダムの子孫の者は誰ひとり、そのさくを越えて、命を与える実を食べることができなかった（創世記 3:24）。だから永遠に生きる罪人はいないのである。

## サタンの魔の手

しかし人類の墮落後、サタンは、部下の悪天使たちに命じて、人は生まれながらに不死であると信じ込ませるように努力させた。まずこうした間違っただけの考えを受け入れさせておいて、罪人は永遠の不幸の中に生きなければならないものであると思込ませるのである。その後、暗

黒の王サタンは、彼の部下を通し、いかにも神が執念深い暴君であるかのように見せかけ、神のみ心を喜ばせない者はすべて地獄に投げ込まれ、永遠に神の怒りを受けねばならないのだと断言し、またこのように彼らが永遠の炎の中で、口に言い表せないほどの苦しみにもだえているのに、創造主は彼らをながめて満足なさるのだと断言する。

このようにしてサタンは、自分自身の悪い性質を、人類の創造主であり恵み深い主であられる神の性質であるかのように思わせる。残酷さはサタンのものである。神は愛である。最初の反逆者によって罪が生じるまで、神の創造されたものはすべて純潔で清く美しかった。人類を罪に誘惑し、できれば滅ぼしてしまおうとする敵はサタン自



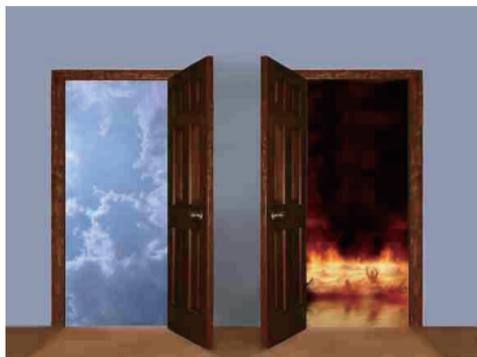
身である。そして犠牲者を確実に手中に収めると、自分が生じさせた滅びに狂喜する。彼はもし許されるなら、全人類をその網の中に捕えるであろう。もし神の力が介入しなければ、アダムの子孫である人類は誰一人逃れることはできないであろう。

今日もサタンは、創造主なる神への信頼に動揺をきたらせ、神の政府の知恵とその律法の正当性を疑わせて、始祖アダムとエバを陥れたように、人類を陥れようとしている。サタンとその部下たちは、自分たちの反逆と悪意を正当化するために、神を自分たち以上に悪い方であるかのように言いふらしているのである。大欺瞞者サタンは、自らの残忍な性格を天の父なる神に転嫁して、このような不正な統治者に従おうとしなかったために、天から追放されて非常な虐待を受けたのだと人々に思わせようとしている。彼は、主の厳格な命令の下に束縛されるよりも、自分の寛大な支配に服するならば、どれ

ほど自由を享受できるか分からないと世に吹聴する。このようにして、サタンは人々の心を惑わし、神に対する忠誠を失わせるのである。

## 恐るべき永遠の責め苦説

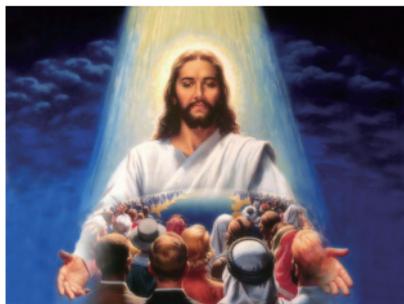
悪人が死ぬと永遠の焦熱地獄において火と硫黄をもって苦しめられるという教理や、この短い地上の生涯において犯した罪のために、神が生きておられるかぎり責め苦を受けるという教理は、愛とあわれみの感情や正義感から見て、実にいまわしいかぎりである。それにもかかわらず、この教理は一般に広く伝えられて、今なお、多くのキリスト教会の信条の中に含まれている。ある博学な神学博士は次のように言っ



た。「地獄で悩み苦しんでいる光景を目撃することは、永遠に聖徒たちの幸福を増すのである。同じ性質を持ち、同じ環境の下に育った者でありながら、一方はこのような悲惨な状態に陥っているにもかかわらず、彼ら聖徒たちは、特別の恵みに浴している。このことを自覚するとき、彼らは自分たちがどんなに幸福であるかを感じるのである。」他の者は、また次のように言った。「滅亡の命令が、怒りの器たちの上に永遠に執行され、彼らの苦しみの煙は、あわれみの器たちの目の前で永遠に立ちのぼる。あわれみの器たちは、こうした悲惨な者たちの運命に陥ることを免れて、アーメン、ハレルヤ！主を賛美せよ！と叫ぶのである。」

神の言葉のどこに、そのような教えが見いだされるであろうか。贖われて天にある者たちは、あらゆるあわれみと同情の念を失い、普通の人間の感情さえ持たなくなるのであろうか。彼らは、禁欲主義者のように無関心になり、未開人

のように残酷になる  
のであろうか。いや、  
そうではない。こう  
したことは、神の書  
の教えではない。こ  
こに引用したような



意見を表明する人々は、博学であり実直な紳士  
ではあろうが、しかし、サタンの詭弁に惑わさ  
れているのである。サタンは、聖書の強烈な表  
現を彼らに曲解させ、自らの悪意や恨みでもっ  
てその言葉を彩るのである。そのようなこと  
は、創造主なる神のなさることではない。「主  
なる神は言われる、わたしは生きている。わた  
しは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その  
道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を  
翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。……  
あなたはどうして死んでよかろうか」(エゼキ  
エル 33:11)。

もし仮に、神が絶え間ない責め苦を見て喜

びとし、地獄の炎の中に閉じ込められている者たちの苦しみの叫びや悲鳴や呪いの声を楽しみとされるとしたところで、それはいったい神にとって何の益になるであろうか。このような恐ろしい叫びが、無限の愛を有しておられる神の耳に音楽となるであろうか。悪人が永遠の責め苦を受けることは、宇宙の秩序と平和とを破壊する罪に対し、神がどんなに憎悪なさるかを表すものであると、主張されている。しかし、ああ、これは何という冒瀆であろう！あたかも、罪に対する神の憎悪が、それを永続させる理由であるかのように言われている。これらの神学者の教えによるならば、あわれみを受ける希望もなく永遠の責め苦に会うことは、その哀れな苦惱者たちを狂気に陥れ、そして彼らが怒って呪いと冒瀆の言葉を吐くとき、彼らは永遠にその罪の重さを増すと言うのである。しかし、このようにして永遠にわたって罪を増し加えていっても、神の栄光は決して高揚されるものではない。

この異端的な永遠の責め苦という邪説が及ぼした害悪は、到底人間の知力でははかり知ることができない。愛と恵みとに満ち同情に富む聖書の教えが、迷信によって暗くされ、恐怖で覆われている。サタンが、神のご品性を、どんなに誤った色彩で彩ってきたかを思うとき、多くの者たちが我々の恵み深い創造主を恐れ、また嫌悪するに至るのも不思議ではないのである。今日、全世界に蔓延し、一般の講壇から説かれているこの種の神に関する恐ろしい見解は、幾千、いや幾百万の者を、懐疑論者や無神論者にしたか分からない。

この永遠責め苦説は、バビロンがすべての国民に飲ませる憎むべき酒と呼ばれている偽の教理の一つである（黙示録 14:8;17:2 参照）。キリストの牧師たちがこの邪説を受け入れて、説教壇から語るということは、実に不思議なことである。彼らは偽りの安息日をローマ法王教から受け継いだように、同じくこの霊魂不滅の教

えを法王教から伝承されたのである。確かに、これは、偉大で善良な人々によって教えられてきた。しかし彼らには、この問題について、我々に与えられたような光が与えられてはいなかったのである。彼らは、その時代に与えられた光に対して責任があった。そして我々は、我々の時代に与えられた光に対して責任を負わなければならない。万一、我々が神のみ言葉の証から離れ、先祖たちが教えたものであるからという理由で偽りの教理を受け入れるならば、我々は、バビロンに下された罪の宣告を受ける。我々はその憎むべき酒を飲んでいることになるのである。

## 普遍救済説の欺瞞

永遠の責め苦の教理を嫌悪<sup>けんお</sup>する多くの人々は、これと反対の誤りに追い込まれる。聖書に神は愛とあわれみに満ちたお方として示されて

いるので、神が被造物を永遠の焦熱地獄に閉じ込めるようなことは信じることができないのである。しかし、魂はもともと

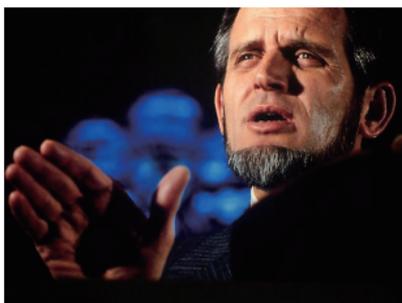


と不死であると信じられているので、全人類はついには救われると結論する他はないのである。聖書に恐ろしいことが記されていても、それは単に人間をおどして服従させるために過ぎず、文字通りに成就するものではないと考える人が多い。この理屈からいえば、罪人が利己的な快樂の生活を続け、神の律法を無視しても、最後には神の恵みにあずかることができるということになる。神の恵みにつけ込んだこのような教理は、神の正義を無視し、肉の心を喜ばせ、大胆に罪を犯させるようになる。

万人はことごとく救われると信じる人々が、人心を毒するこの教理を支持するために、聖書

をどのように曲解するかを示すためには、彼ら自身が言っていることを引用すれば十分であろう。事故のために即死した、神を信じていなかった一青年の葬儀において、普遍救済論者（ユニバーサリスト）の牧師は、ダビデに関する次の聖句を引用した。「彼は、アムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが落ち着いた」（サムエル下 13:39 欽定訳）。

この牧師は、告別説教において次のように言った。「わたしは、罪のうちにこの世を去る人々、あるいは酩酊状態のまま死ぬ人、その着物に罪の赤いしみを残したままで死ぬ人、または、この青年のように、信仰を告白せず、宗教生活の経験を持たないまま死ぬ人の運命について、よく質問を受けるが、この聖句が、この恐ろしい問題に解決を与えることを知り心安んじるもの



である。アムノン是非常に罪深く悔い改めなかった。そして酒に酔い、酩酊状態のまま殺された。ダビデは神の預言者であった。彼は、アムノンが来世において、幸福になるか不幸になるかを知っていたに違いない。このとき、彼の心境はどうであったらうか。『王は心に、アブサロムに会うことをせつに望んだ。彼はアムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが落ち着いたからである。』

この言葉から、どんな結論が得られるであろうか。ダビデは決して永遠の苦しみを信じていなかった。我々もそう信じる。そして、最後には普遍的な純潔と平和が来るといふ、さらに喜ばしくさらに高尚で慈愛にあふれた仮説を支持するところの、輝かしい証拠をここに発見するのである。彼は、自分の息子が死んだのを見て、気持ちが落ち着いた。それはなぜであるか。すなわち彼は、預言的眼によって栄えある未来を予見し、息子が一切の誘惑から自由にされ、束

縛から解放されて、罪の汚れから清められ、そして十分に清めと光を与えられた後で、昇天して、天の喜びにあずかっている靈魂の群れに入れられるのを見ることができたからである。彼にとって唯一の慰めは、彼の息子が現在の罪と苦悩の状態から解き放たれて、聖靈の清い息吹が注がれるところに行き、無知な魂が天の知恵と永遠の愛の喜びに呼び覚まされ、こうして、清い品性を与えられて、天の嗣業の安息と交わりに入ることであった。こう考えるとき、天国の救いは、人間がこの地上でなし得ることや、今心を変化させること、あるいは、今何を信じ、どんな信仰を告白するかなどによらないと、我々が信じていることも、理解してもらえらるであらう。」

こうして、キリストの牧師と称している人が、エデンの園でへびが語った「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。」「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪

を知る者となる」という偽りの言葉をくり返している。彼は、極悪の罪人たち、すなわち、人を殺し、盗み、姦淫を行う人々が、死後、永遠の祝福にあずかる準備をすることができるというのである。この聖書の曲解者は、何を根拠にして、こういう結論に達するのであろうか。それは、神の摂理に対するダビデの服従をあらわしている一つの文章からである。「王は心に、

アブサロムに会うことをせつに望んだ。彼はアムノンが死んだのを見て、アムノンに関しては気持ちが落ち着



いたからである。」彼の激しい悲哀は、時がたつにつれて、やわらげられ、その思いは、死んだ息子から、生きている息子に、すなわち、自らの犯罪の当然の罰を恐れて逃亡した息子に向けられたのであった。ところが、これが、近親

相姦の罪を犯し、酒に酔ったアムノンが、死んだ時に直ちに幸福な住居に移され、そこで清められて、罪のない天使たちとの交わりに入る準備をするということの、証拠だと主張するのである。これはまことに、人の心を満足させるのに都合のよい快い作り話である。これは、サタン自身が作り出した教義であって、効果的にサタンの働きをしている。こういう教えがあるのであるから、罪悪が満ちても驚くにはあたらないのである。

## 誤った聖書解釈

この一人の偽教師が行ったことは、他の多くの人々がしていることの一例である。多くの場合、聖書のある句の前後を切り離して、その本来の意味とは全く反対に解釈できるものを作って逆用し、聖書に何の根拠もない教義の証明に用いられる。酒に酔ったアムノンが、天国にい

る証拠として引用された証言は、酒に酔う者は神の国を継ぐことはないという、明確で否定することのできない聖書の言葉に全く相反する推論にすぎない（I コリント 6:10 参照）。このようにして、疑う人々、信じない人々、懐疑論者たちは、真理を偽りにしてしまふ。その結果として、多くの者が彼らの詭弁に欺かれて、肉の生活に安んじ、惰眠をむさぼっている。

もし人が死亡すると同時に、魂が天に移されることが事実であるとするならば、生きているよりは、死んだほうが望ましく思われることであろう。こうしたことを信じた結果、自らの生命を断った者も多いのである。困難や悩みや失望に陥ったとき、もろい生命の糸を断ち切って、永遠の世界の幸福へと舞い上がることが、いかにも易しいことのように思われるのである。

神は、その律法を犯す者を罰せられるということについて、み言葉の中にはっきりと証拠を与えておられる。神は慈悲深いお方であるか

ら、罪人に対しても刑罰を与えることはないと思い込んで安心している者は、ただカルバリーの十字架をながめて見るべきである。汚れのない神のみ子の死が、「罪の支払う報酬は死である」事実を証し、神の律法を犯す者は、誰であろうとも、それ相応の報いを受けなければならないことをあらわす。罪のないイエスが、人類のために罪となられた。罪を負い、天父のみ顔を隠されて見ることができず、ついに、キリストの心臓は破



裂し、その生命は砕かれたのである。こうした犠牲はすべて、罪人が救いにあずかるために払われたのである。これ以外に、他のどんな方法によっても人は罪の刑罰から免れることはできない。このような価を払って備えられた贖いにあずかることを拒否する者は、犯した罪の刑罰を自分の身に負わなければならない。

普遍救済論者（ユニバーサリスト）が、幸福な聖天使として天国に入れている、不信仰の者や悔い改めない人々について、聖書はさらに何と教えているか考えてみよう。

「かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう」（黙示録 21:6）。この約束は、渇く者に対してのみ与えられている。命の水の必要を感じ、他のすべてのものを失ってもそれを求める者だけが、満たされるのである。「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる」（同 21:7）。同じくここにも条件が明示されている。すべてのものを受け継ぐためには、罪に抵抗して勝利しなければならないのである。

主は、預言者イザヤによって、こう言われる。「正しい人に言え、彼らはさいわいであると。彼らはその行いの実を食べるからである。」「悪しき者はわざわいだ、彼は災をうける。その手

のなした事が彼に報いられるからである」(イザヤ 3:10,11)。また、「罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいただく者には幸福があることを、わたしは知っている。しかし悪人には幸福がない」と賢者は言っている(伝道の書 8:12,13)。そしてパウロも、次のように証言している。罪人は、「神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。」「神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。」「悪を行うすべての人には、……患難と苦悩とが与えられ(る)」(ローマ 2:5,6,9)。

「すべて不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことができない」(エペソ 5:5)。「すべての人と相和し、また、自らきよくなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」(ヘブ

ル 12:14)。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、神の戒めを行う [欽定訳] 者たちは、さいわいである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている」(黙示録 22:14,15)。

## 人は自ら運命を定める

すでに神は人類に対し、神の品性がどのようなものか、また罪をどのように処分かさるかを明示している。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず」(出エジプト 34:6,7)。「主はおのれを愛する者をすべて守られるが、悪しき者をことごとく滅ぼされます。」「罪を犯す者

どもは共に滅ぼされ、悪しき者の子孫は断たれる」(詩篇 145:20;37:38)。神の政府の権威と権力が、反逆を鎮圧するために用いられる。しかし、すべての応報・処罰の執行は、恵み深く忍耐強い、慈悲に富んだお方としての神の品性と完全に調和するのである。

神は、人間の意志または判断に対して強制はなさない。神は、奴隸的服従をお喜びにならない。神はご自分のみ手の業である被造物が、愛するにふさわしいお方として神を愛するように望まれる。神は、彼らが、神の知恵と正義と慈愛とをよく悟った上で、神に従うことを望まれる。そして、神のこうした性質について正しい理解を持つ者はみな、神の特性に感嘆して神に引きつけられ、神を愛するようになるのである。

救い主が教え、模範を示された、思いやりとあわれみと愛の原則は、神のみ心と品性の写しである。キリストは、父から受けたことを伝え、

それ以外の何ものも教えないと言われた。神の政府の原則は、「あなたの敵を愛せよ」という救い主の教えと



完全に一致するのである。神は悪人を処罰されるが、それは宇宙の幸福のためであり、同時に刑罰を受ける本人たちの幸福のためでさえあるのである。神は、あくまで人類の幸福を希望してやまない。しかしそのためには、彼らが神の政府の律法と彼の正しいご品性に服する以外に道はないのである。神は彼らの周囲をご自分の愛のしるしで満たし、その律法を悟らせ、あわれみの招待を発せられる。しかし彼らは、神の愛を軽んじ、その律法を無効にし、その慈悲を拒むのである。彼らは絶えず天からの賜物を受けながら、与え主である神のみ名を汚す。彼らは、神が彼らの罪を憎まれることを知って、神

を憎むのである。神は、彼らの強情な態度を長く忍ばれるけれども、ついに彼らの運命が定まるべき決定的な時が来る。その時、神は、このような反逆者たちを、ご自分の側に縛りつけられるであろうか。彼らに、神のみ心を行うように強制されるであろうか。

サタンを指導者とし、その権力に支配されてきた人は、神の前に出る用意がない。高慢、欺瞞、放蕩、残酷が、彼らの性質になってしまった。彼らは、天国に入って、この地上で軽蔑し憎んでいた人々と、永遠に住むことができるであろうか。真理は、偽りを言う人には決して好まれない。柔和は、自尊心や誇りを満足させない。純潔は、腐敗した人には受け入れられない。無我の愛は、利己的な者には、魅力あるものと思われない。この地上の利己的利益に全く心を奪われている者に、天は、どんな楽しみを与えることができるであろうか。

## 神の正義とあわれみ

神に対する反逆に一生を費やしてきた者が、仮に突然天に移されて、そこにいつもみなぎっている高尚な清い完全な状態を



目撃したとしよう。どの人の心も愛に満たされ、どの顔も喜びに輝き、神と小羊をほめたたえる美しい音楽が奏でられ、み座に座しておられるお方の顔からは、贖われた者たちの上に絶えず光が照り輝いているとする。神と真理と聖潔を憎んでいた者たちが、ここで天上の大群に加わって共に賛美の歌声をあげることができるだろうか。果たして彼らは、神と小羊の栄光に耐えられるであろうか。いや、それはできないのである。彼らには、天国のために準備をするように幾年もの恵みの期間が与えられていた。に

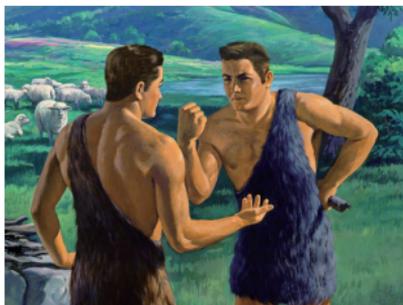
もかわらず、彼らは純潔を愛するように心の訓練をしなかった。彼らは、天国の言葉を学ばなかったため、今となってはもう遅すぎるのである。神に対して反逆した生涯が、彼らを天にふさわしくない者にしてしまった。天の純潔と聖潔と平和とは、彼らにとって責め苦となるであろう。神の栄光は、彼らにとって焼き尽くす火なのである。彼らを贖うために死なれたイエスのみ顔を避けるために、むしろ彼らは滅亡を願うであろう。悪人の運命は、彼ら自身の選択によって決まるのである。彼らが天から除外されるのは、彼らが自ら進んでそうするのであり、神の正義とあわれみによるのである。

大いなる日の炎は、ノアの洪水の水のように、悪人たちは直すことができないという、神の裁断を宣言する。彼らには、神の権威に服従する気持ちがない。彼らの意志は反逆に用いられてきた。そのため、死に臨んで、彼らの思想の流れを反対の方向へ向け、背反から服従へ、

憎しみから愛へと変えるにはもはや遅すぎるのである。

神は、殺人者カインを生きながらえさせることによって、罪人を生かし、勝手気ままな罪の生活を続けさせる結果がどうなるかという実例を、世界に示された。

カインの主張と行為の影響によって、彼の子孫は罪に誘われ、ついに「人の悪が地にはびこり、す



べてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかり」になった。「時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」（創世記 6:5,11）。

神は、あわれみにより、ノアの時代の悪人たちを一掃された。また神は、あわれみのうちに、腐敗したソドムの住民を滅ぼされたのである。サタンの欺瞞の力によって、悪を行う者は共鳴と賞賛をかちえ、こうして常に他の者を反逆に

導き入れているのである。カインの時代、ノアの時代、そしてアブラハムと、ロトの時代においてそうであったように、今日の時代においてもそうである。神が、その恵みを拒絶した者を最終的に滅ぼされるのは、宇宙に対するあわれみからである。

## 永遠の生命か、永遠の滅びか

「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」(ローマ 6:23)。生命は義人の嗣業であるが、死は悪人が受くべき分である。モーセはイスラエル人に向かって「見よ、わたしは、きょう、命とさいわい、および死と災をあなたの前に置いた」と言った(申命記 30:15)。ここで言われている死とは、アダムに宣告された死ではない。なぜなら、すべての人類が彼の罪の報いを受けているからであ

る。永遠の生命と対照されているのは、「第二の死」である。

アダムの罪の結果、死は全人類に及んだ。すべて生きる者はことごとく墓に下って行く。そして、救いの計画が設けられたことによって、すべての者は墓からよみがえらせられるのである。「正しい者も正しくない者も、やがてよみがえる。」「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」(使徒行伝 24:15、I コリント 15:22)。しかし、よみがえらせられる二種類の人々は、はっきりと区別されている。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、



さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」(ヨハネ 5:28,29)。復活に「あずかるにふさわしい」者たちは、「さいわいな者であり、また聖なる者である。」「この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない」(黙示録 20:6)。しかし、悔い改めと信仰によって許しを受けなかった者は、その犯した罪に対する刑罰、すなわち、「罪の支払う報酬」を受けなければならない。彼らは、「そのしわざに応じて」長さや激しさの異なる刑罰を受けるが、ついには、第二の死に終わる。罪人を罪のまま救うというようなことは神の正義とあわれみからいって不可能なために、神は罪人からその存在を剥奪される。彼は罪のゆえに、生きる権利を喪失し、生きるにふさわしくないことを証明したのである。靈感を受けた筆者は言っている。「悪しき者はただしばらくで、うせ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない。」また別の筆者は宣言する。彼らは「かつてなかったようになる」(詩篇 37:10、オバ

デヤ書 16)。彼らは、辱めを受けて、希望のない永遠の滅びに沈むのである。

こうして、罪とその結果であるあらゆる災いと破滅が終わりを告げる。詩篇記者は、「あなたはもろもろの国民を責め、悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。敵は絶えはてて、とこしえに滅び」と言っている（詩篇 9:5,6）。黙示録の中で、ヨハネは、永遠の世界を予見し、不調和な音が一つもない全宇宙の賛美の歌を聞いた。天地のあらゆる被造物が神に栄光を帰していた（黙示録 5:13 参照）。その時には、永遠の刑罰を受けて、苦しみながら神を汚す失われた魂などいないのである。地獄の哀れな魂の叫びが、救われた者の歌に混じることなどないのである。

## 死後の状態

死者に意識があるという教理は、霊魂不滅と

いう根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。一般に信じられているところによれば、贖われて天に昇った者たちは、地上で行われている一切のことを、そして特に、彼らがあとに残してきた友人、知人たちのことを、よく知っているというのである。しかし、死者が、生きている人々の悩みを知ったり、自分の愛する者が罪を犯しているのを見たり、彼らが人生のあらゆる失望、悲哀、苦悩に耐えるのを見て、どうして幸福になることができようか。地上の友人たちの上をさまよう者に、天国の喜びがどれだけ味わえようか。また、息が絶えたとすぐに、悔い改めなかった者の魂は地獄の炎の中に投げ込まれるという考えは、何と嫌悪すべきものであろうか。自分たちの友人が、不用意のままに墓に下り、永遠の苦悩に陥るのを見る人々は、どんなに激しい苦しみを味わうことである

うか。このような悲惨なことを考えて、気が狂った者も多いのである。

こうしたことについて、聖書は何と言っているであろうか。ダビデは、死者には意識はないと言っている。「その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」(詩篇



146:4)。ソロモンも同じ証言をしている。「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない。」「その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。」「あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである」(伝道の書 9:5,6,10)。

昔、ヒゼキヤ王が神に祈った結果、その命が15年間延ばされた時、感謝の念に満たされた王は、神の大いなるあわれみに対して賛美をささげたが、その賛美の中に、彼の大きな喜びの理由が挙げられている。「陰府は、あなたに感謝することはできない。死はあなたをさんびすることはできない。墓にくだる者は、あなたのみことを望むことはできない。ただ生ける者、生ける者のみ、きょう、わたしがするように、あなたに感謝する」(イザヤ 38:18,19)。一般に行き渡っている神学は、死んだ義人は天国にあって永遠の祝福にあずかり、朽ちることのない舌で神を賛美していると言うのである。しかし、ヒゼキヤは死にあたって、そのような輝かしい期待を持つことはできなかった。彼の言葉と詩篇記者の証言は一致している。「死においては、あなたを覚えるものはなく、陰府においては、だれがあなたをほめたたえることができますか。」「死んだ者も、音なき所に下る者も、主をほめたたえることはない」(詩篇

6:5;115:17)。

ペテロは、ペンテコステの日に、ダビデについて「彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている。」「ダビデが天に上ったのではない」と言明した（使徒行伝 2:29,34）。ダビデが復活の時まで墓の中にとどまっているという事実は、義人は死んだ時に天に昇るのではないということを証明している。復活を通して、またキリストの復活の事実による功績によってのみ、ダビデは、ついに神の右に座することが許されるのである。

パウロも言っている。「もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中になるだろう。そうだとすると、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのである」（I コリント 15:16-18）。もし、過去 4000 年にわたっ

て、義人が死後直ちに昇天していたと言うのであれば、どうしてパウロは、復活がないならば「キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまった」と言うことができたのであろうか。もしも、義人が死ぬとすぐ天国に行ったのであれば、復活は必要ないはずである。

## 復活信仰の重要性

殉教者ティンダルは、死者の状態について次のように言明した。「わたしは公然とこの事を言う。彼らがすでにキリストのような全き栄光にあずかり、神に選ばれた天使たちのような状態にまでなっているとの説には従うことができない。わたしは信仰の上から、そうは思わないのである。なぜならば、もしそうであるとすれば、肉体の復活を説く必要はないからである」(William Tyndale, Preface to New Testament [ed.1534] .Reprinted in“British Reformers-

Tindal, Frith, Barnes,”p.349)。

死ねば不死の祝福にあずかるという希望のために、聖書の復活の教理が一般に軽視されるようになったということは、否定できない事実である。アダム・クラーク博士は、この傾向について、次のように言った。「復活の教義は、今日よりも初代の教会において、大いに重要視されていたように思われる。使徒たちは絶えずこの点について力説し、信徒たちがこれによって熱心、服従、快活であるようにと、激励してやまなかった。それなのに、彼らの後継者は、今日ほとんどその事に言及しないのはいったいどうしてであろう。使徒たちが盛んに説教したので、当時の信徒たちは熱心にこれを信じたのである。我々が説教することを、我々の聴衆は信じるのである。福音の教義の中で、これほど強調されているものはないが、一面、現代の説教壇において、これほど軽々しく扱われている教義もない」(“Commentary”remarks on 1

Corinthians 15, par.3)。

このような状態が続いて、ついに、復活の輝かしい真理はほとんど隠され、キリスト教世界から見失われてしまった。こうして、ある指導的な宗教的著作家は、第一テサロニケ 4 章 13 節から 18 節のパウロの言葉を注解して、次のように言うのである。「聖徒にとって幸いなる靈魂不滅の教理は、疑わしい再臨の教えの代わりに、実際に我々に慰めを与えてくれる。我々が死ぬとき、主は我々を救うために来られるのである。我々はそれを待ち望み、見守っていないといけない。死者は、すでに栄光に入っている。彼らは、審判と祝福を受けるためにラッパが鳴るのを待たないのである。」

しかし、イエスは弟子たちのもとを去るにあたって、彼らがすぐにご自分のもとに来るとは決して仰せにならなかった。「あなたがたのために、場所を用意しに行く。」「そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あ

あなたがたをわたしのところに迎えよう」と彼は言われた（ヨハネ 14:2,3）。パウロはさらに次のように言っている。「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主



に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」そして彼は、「これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」とつけ加えている（Iテサロニケ 4:16-18）。こうした慰めの言葉と、前に引用した普遍救済論者の牧師の言葉には、何と大きな相違が見られることであろう。後者は、死者がどんなに罪深くあっても、地上で息を引

き取った時、天使たちの間に迎え入れられたと  
いって、友を失って悲しむ人々を慰めた。しか  
し、パウロは、兄弟たちに来たるべき主の再臨  
を示し、その時に、墓の束縛が解かれて、「キ  
リストにあって死んだ人々」が永遠の生命によ  
みがえると断言している。

## 審判はいつ行われるか

誰でも、祝福された住居に入り得る前に、調  
査され、その品性と行為とが、神のみ前で吟味  
されなければならない。すべての者は天の書に  
記されたことによってさばかれ、その行為に  
従って報いを受ける。しかし、この審判は、人  
が死ぬときに行われるものではない。我々はパ  
ウロの次の言葉に注意したい。「神は、義をもっ  
てこの世界をさばくためその日を定め、お選び  
になったかたによってそれをなし遂げようとさ  
れている。すなわち、このかたを死人の中から

よみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」(使徒行伝 17:31)。使徒パウロはここで、ある一定の時—その当時—にあっては、まだ将来のことであった—が、この世の審判の時として定められていることを、はっきりと述べた。

その同じさばきの時について、ユダも語っている。「主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。」そしてまた、彼はエノクの言葉を引用している。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためである(ユダ 6,14,15)。また、ヨハネも言っている。「死んでいた者が、……御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に

書かれていることにしたがって、さばかれた」(黙示録 20:12)。しかし、死者がすでに天国の祝福にあずかっているのであれば、あるいは地獄の炎に苦しめられているのであれば、将来の審判は何のために必要なのであろうか。これらの重大な点に関する神の言葉の教えは、曖昧あいまいでもなければ矛盾してもいけない。それは普通の人の頭で理解できるのである。率直な心の持ち主であれば、こうした一般の説に、知恵と正当性を認めることができるであろうか。義人は、長期にわたって神のみ前に住みながら、審判の時に調査を受けて、その後で、「宜よいかな、善かつ忠なる僕、……汝の主人の歡喜よろこびに入れ」(文語訳)と賞賛されるのであろうか。悪人は、刑罰の場から引き出されて、全地の審判主から、「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ」という宣告を受けるのであろうか(マタイ 25:21,41)。ああ、何というあざけり、神の知恵と正義に対する何と恥ずべ

き非難であろう。

## 死は眠りである

霊魂不滅説は、ローマが異教から採用して、キリスト教の中に織り込んだ偽りの教理の一つである。マルチン・ルターは、これについて「ローマ法王の教書というはきだめの一部をなす、奇怪な作り話」であると言っている (E.Petavel, "The Problem of Immortality," p.255)。「死者は何事をも知らない」という、伝道の書の中にあるソロモンの言葉を注解して、ルターはこう言っている。「ここで、死者には何ら意識がないことが証明されている。死者には、義務もなければ、科学も知識も知恵もないと彼は言っている。ソロモンは、死とは眠りであり、何一つとして感覚のないものと判断している。死者がその身を横たえるならば、何日であろうが、何年であろうがそれには関わりがない。そ

して、目が覚める時には、ほんの一瞬しか眠らなかったかのように思うであろう」(Martin Luther, "Exposition of Solomon's Booke Called Ecclesiastes," p.152)。死ねば義人は天に行き、悪人は罰せられるというようなことは、聖書のどこにも書いてない。父祖にしても預言者にしてもそのような証言を与えているものはないのである。キリストも使徒たちも、そのような暗示は何も与えなかった。人間が死ぬと直ちに天に昇るというようなことを、聖書は教えていないのである。彼らは、復活の日まで眠っていると記されている (I テサロニケ 4:14、ヨブ記 14:10-12 参照)。人の死、すなわち銀のひもが切れ、金の皿が砕ける時、人の思いはなくなるのである (伝道の書 12:6 参照)。墓に下る者は、何も言わない。日の下に行われることは何事も知らない (ヨブ記 14:21 参照)。疲れた義人たちにとって、それは幸福な休息である。墓にある者にとって、その期間が長くとも短くとも、ほんの一瞬間にすぎないのである。彼らは眠っ

ているのである。そして、やがて神のラッパが鳴り響く時、彼らは目を覚まし、神によって栄光ある不死を着せられるのである。「ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、……この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。『死は勝利にのまれてしまった』」（I コリント 15:52-55）。深い眠りから目ざめた時に、彼らは、考えることをやめたそのところから考え始める。最後の感覚は死の苦痛であった。最後の思いは、自分は死の力に屈するのだ、ということであった。しかし、彼らが墓から起きあがる時、彼らの最初の喜ばしい思いは、「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」という勝利の叫び声となって響くのである（同 15:55）。

もっと詳しく知りたい方のために、  
大争闘小冊子シリーズの完全版

## “キリストとサタンの大争闘”



E. G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

## 大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com